



ふるさと御所 文化財探訪

其の十七

古墳時代〈5〉

鴨都波1号墳 (1)

墳丘規模と副葬品
内容のギャップ生涯学習課 文化財係
☎内線696

鴨都波1号墳は、済生会御所病院の増築工事に伴う発掘調査により、水田下から不時発見された前期古墳です。その副葬品内容は、9月号に

掲載した一覧表で示したとおり、他を圧倒するものがありました。実は一辺わずか20m足らずの小規模な方墳に過ぎません(写真1)。

今後数回にわたって鴨都波1号墳を取り上げることによって葛城の4世紀代の歴史を紐解いていきますが、前記のとおり墳丘が小規模であることは大変重要な事実ですので、この点について少し詳しくみておくことにします。

墳丘の周囲には幅3～5mの濠が巡っています。この濠には水を溜める機能はなく、本来は隍と呼ぶべきものです。その隍の底近くには多量の土器が投棄されていました(写真2)。土器は土師器の小形丸底埴、小形器台、高杯、甕などで、鴨都波1号墳の被葬者を葬るにあたってのお祭りに用いられたものとみられ、それらを隍に投棄し破碎することによって被葬者との決別の気持ちを表したものと考えられます。これは弥生時代以来行われてきた伝統的な葬法の一つといえます。また、その隍は北西隅で一部途切れており、渡り土手となって墳丘と外部をつなぐ構造となっていることは特筆されます(写真3)。市内の小林遺跡で見つかった弥生時代の方形周溝墓にもこのような施設が見られ、加えて鴨都波1号墳の墳丘には、古墳の外表施設として一般的な葺石も埴輪もありま

せん。つまり鴨都波1号墳の墳丘は、弥生時代の方形周溝墓と見まがうばかりの構造となっているのです。

鴨都波遺跡はこのシリーズにも度々登場した弥生時代の拠点的大集落ですが、鴨都波1号墳はまさにその系譜を引く伝統的な勢力の長と評価できます。とはいえ一般的には、鴨都波遺跡のように、弥生時代の拠点的大集落がそのまま古墳時代に継続することは極めて稀で、ましてそこに前期古墳が築造されるな



写真2：濠内の土器出土状況(南から)

どということとは皆無と言っても過言ではありません。

鴨都波1号墳において墳丘規模に相応しくない、豊富で突出した副葬品が出土した謎を解く鍵は、こうした鴨都波1号墳の系譜の特異性が大いにかかわるに相違ありません。この問題については、鴨都波1号墳のシリーズの最後にもう一度取り上げましょう。



写真3：渡り土手と濠(北から)